

井勝 久喜

「循環型社会」のイメージは？



「循環型社会を作ろう」とか、「3Rを推進しよう」という言葉を聞いたことがあると思いますが、このフレーズで多くの方が思い浮かべるのは、「リサイクル社会」ではないでしょうか。「循環」と聞けば「めぐる」という言葉を想像し、「循環型社会」といえば「リサイクル社会」を思い浮かべるのは当然だと思います。また、「3R」で思い浮かべるのは、固体の廃棄物だと思いますが、廃棄物は固体だけでなく、気体、液体、廃熱などがあります。これらは、そのどれもが、エネルギー、資源、食糧、水、有機資源に関係しており、固体の廃棄物だけリサイクルしても循環型社会はできません。

実は、循環型社会形成推進基本法における「循環型社会」の定義では、「循環」が目的ではなく、天然資源の消費が抑制され、環境への負荷が低減された社会を作ることが目的となっています。

井勝 久喜 氏

1956年生まれ。鳥取県出身。吉備国際大学国際環境経営学部・学部長・教授。環境省登録環境カウンセラー（市民部門）。（財）おかやま環境ネットワーク評議員会。

従って、この定義からすると循環型社会はリサイクル社会のことではありません。循環型社会の真の目的は、脱化石と省資源であり、枯渇性資源の循環利用による枯渇の回避、循環資源の持続可能な利用などを通じた人間生活の豊かさの向上と継続にあります。しかし、「循環型社会」と聞いて、「持続可能な社会」を思い浮かべる人はほとんどいないと思います。

環境問題ではこのようなことがよくあります。例えば、地球温暖化防止についても、二酸化炭素の削減が目的化してしまっていますが、本当は資源消費を押さえた持続可能な社会を作ることが目的でなければなりません。少し考えれば、おかしきと言うことが分かるのですが、なかなか理解することが難しい状況です。「3Rを推進しよう」と聞いて、「リサイクル」を思い浮かべる人はいても、「資源の節約」を思い浮かべる人は少ないのではないのでしょうか。また、循環型社会の指標としてリサイクル率などが示されることがありますが、真の循環型社会とは何かとすることを考えたとき、適切な指標とは思えません。というより、リサイクル率を示すことで、「循環型社会」=「リサイクル社会」という誤

解を与えてしまっているように思えます。

これらのことは、使われている用語（誤解を与えそうな）の問題と共に、あまりにも単純化した説明が行われてきたことに問題があるように思えます。環境問題について市民に注意を喚起するためには、地球温暖化や環境ホルモン、リサイクルなど分かりやすい報道や伝え方も必要でしょうが、そのことが、かえって環境問題の解決を遅らせている可能性もあります。そろそろ真の環境問題解決、つまり、持続可能な社会を作るためには何が必要なのかについて、丁寧に伝える努力をすることが必要でしょう。

ブータン王国では、GDP（国内総生産）ではなく、GNH（グロス・ナショナル・ハピネス/国民総幸福）の向上を目指して国の政策が行われています。心豊かな人間らしい暮らし、自然と共生した人間社会、貧しくない経済社会を維持しつつ環境にも負荷をかけない社会システム、弱者に配慮した持続可能社会、これらを総合的に判断する指標を考え、その指標を基に多くの方が議論できるような仕組みを考えることが必要な時期に来ているのではないのでしょうか。